

2021年12月号

瓢鮎抄（一五六） 尾池和夫

日曜は秋の小雨に濡れながら  
秋雨や待ち人の来ぬ昼さがり  
尻取りのトマトはトマト秋の空  
名医とふ医院の隅よ葉鶏頭  
菱の実の池に菱の葉占領す  
薄と鎖一等三角点困む  
茶草場を手刈りの媪秋夕日  
ひとくさり五言絶句を秋の宵

朝ぼらけ霧包み込む屋敷林  
いつもより傘の重たき秋の雨  
露草の戦略めきし雄蕊かな  
新米を年貢と運びくれし人  
一代にて成らぬ蔵なり新酒酌む  
根上がり松津波伝へて秋の空  
引き汐の荒磯に釣瓶落しかな  
明けぬれば暦どほりの霜の朝  
外出に目的はなき文化の日  
吃逆の止まらぬ朝や冬の雲

2021年11月号

瓢鮎抄（一五五） 尾池和夫

秋出水ありし大井川瘦せて  
行く先の秋天狭き本川根  
山又山岩又岩の秋の川  
揺れながら登りゆくなり谷の秋  
車窓より大き蠶螂放しやる  
側線に放置車のある芒かな  
楓の木見おろしす傾斜地の秋日  
しいたけの榎木が駅の構内に

大岩を抱く木の根や秋の風  
奥大井湖上駅なり秋茜  
作業用吊橋朽ちし葛の花

谷筋へ駆け下りてくる霧襖  
ぎいぎいと凄まじき揺れ秋の旅  
第六十一番隧道出て秋日  
秋雨の止みしと見ればまた激し  
吊橋の揺れ身の内に秋の雲  
じりじりと秋の日射しに駐車場  
旅の終り大盛の新豆腐

2021年10月号

瓢鮎抄（一五四） 尾池和夫

大崩海岸崖へ秋の波  
県道の進路北へと秋の雲  
大井川鉄道沿ひの川澄めり  
機関車トーマス四台揃ひ柿たわわ  
木流の技のありしと秋の川  
青栗の畑足もとに展望台  
罔鮎の看板大き葛の花  
登坂の隧道長し秋の雲

乗車券車内販売秋の旅  
車窓より手を振り返す秋あかね  
発電所谷底に見ゆ葛の花  
長島ダム湖かがやふ秋茜  
岩盤の隧道抜ける秋の山  
流木を山積みにして秋浅し  
山又山隧道あまた秋茜  
岩盤の崩れかけたる法師蟬  
落石を防ぐ木の塀夏蕨  
尾盛とふ駅の裏すぐ鬼胡桃

2021年9月号

瓢鮎抄（一五三） 尾池和夫

愛鷹も富士もかなたへ夏の霧  
白山麓蛇谷八滝巡りけり  
禍を福に転じて二重虹  
雨男招くに川床の予約する

善哉の卓上にあり孔雀草  
水馬に水位下がりし池の底  
休日や世の憂さ蟬の向かう側  
風やめばまつすぐに降る蟬時雨

嘸の後ことば続かず油蟬  
千メートル越えて国見の夏終る  
八月や星占を良とせず

Deatyh Valley, USA

死の谷は五十四度の残暑かな  
三密は密教の行秋暑し  
大文字のかすれや人の声去りぬ  
秋海棠の紅流し去る思ひ川  
さつそくにソロの登場かなかなかな  
ゑのころぐさその一帯を代表す  
あんぱんを半分残す夜半の秋

2021年8月号

瓢鮎抄（一五二） 尾池和夫

深き谷よりはみ出して夏の雲  
白山比咩遷座のことを木下闇  
もののけのみさうな冥み岩清水  
夏草やこの一帯は地滑り地  
ゆるやかな棚田の傾り青田波  
捨植ゑの蕎麦の畑や夏の蝶  
梅雨寒の峡へ深みの蛇谷かな  
臆病と思へるほどの雨蛙

十薬は残し赤牛草を喰む  
赤信号やたらに多く梅雨曇  
地下道は行き止まりなり梅雨湿り  
老杉の注連縄の朽ち梅雨の明  
日曜や蟬のみ起きてゐるらしき  
朝刊の三面は見ず蟬時雨  
蘭奢待知るや正倉院の蟬  
空蟬を拾うて蟬を探しけり  
夾竹桃被爆初めて語る人  
八朔や黒紋付の巽橋

2021年7月号

瓢鮎抄（一五一） 尾池和夫

我独りスーツ姿や若葉風  
果てしなく増ゆる名刺や桜の実  
しばらくは朝型仕事更衣  
裏表なきが取柄よ青瓢  
実桜や看板「花見舟」のまま  
禊場やひとつばたごの花のもと  
林冠の波打つてゐる青嵐  
蒟蒻の花このところ気のゆるみ

大首絵ぬつと出ると浴衣着て  
美人画の目はみな細し甜瓜  
手拭の遊びにあきず夕涼み  
宇宙人に呼びかけゐるか青葉木菟  
喰違見附曲がれば木下闇  
鱧鮓を喰うて祭のなき街へ  
緑蔭の茶席の菓子は「今年竹」  
パリよりの消印時の記念日ぞ  
じいさんの山高帽をパリ祭に  
緑蔭や百年前のパリの地図

2021年6月号

瓢鮎抄（一五〇） 尾池和夫

湯川記念館改装中や桜の実  
デフォルメの地図に迷うて桜の実  
葉桜や舟の朽ちたる高瀬川  
単線の隧道狭し若葉風  
駅出づる同行二人椎若葉  
鯉の絵多き駅舎や若葉風  
はちきんといごつさう揃ひ初鯉  
初鯉こちやんとうまい土佐に来て

緑蔭や楽屋口より大道具  
万緑や定点カメラ隠れ気味

大陸の風容赦なし吹流し  
道草の茅花流しの踏みどころ  
茅花流しグエン王朝遺跡群  
たかんなの野仏を越え竹となる  
孫五人男四人よ柏餅  
花丸の印の小さき鯉のぼり  
ロビーにて人寄るところ武者飾  
母の日や母の記憶に大地震

2021年5月号

瓢鮎抄（一四九） 尾池和夫

春暁や養老断層ますぐなり  
京出でて東へ来れど霾晦  
霾るや富士の山頂けふもなほ  
辞令交付あまたや四月始まりぬ  
出勤を早め花見の回り道  
この里のこれが宝ぞ江戸彼岸  
後先は僥倖待み花見とす  
大津絵の傘さす人よ桜まじ

夜桜に立ち止まらずよマスクして  
弁当をせめてと庭の花見かな  
花屑をくちばしに載せ雄の鴨  
花筏かき分け止まり二羽の鴨  
花筏白川さらに白くして  
御仏の截金鎮め春の昼  
竹落葉ひらりひらりと砂の庭  
春風に負けてはならじ竹箒  
持念仏は薬師如来よ春の塵  
週末を蟄居屏息めく四月

2021年4月号

瓢鮎抄（一四八） 尾池和夫

万葉に詠まれし島や春の風  
砂引草に浅黄斑蝶の寄る岬  
観音崎黒曜石の崖の春

轉や突風ふいに向きを変へ  
絶妙な苦味ありけり露の臺  
犬が人散歩させをり春の朝  
ものの芽や鐘の時刻の墓参り  
春光やリズム狂はぬ竹箒

山内容堂公の酒杯よ朧月  
追手門の春や役所は昼休  
石樋の突き出す先へ春の草  
忍び返し忍びに易し木の芽風  
葦の角昔はここに沈下橋  
春光や洛中洛外高みより  
五重塔の梯子直立風光る  
狛犬を据ゑ閉鎖とや弥生尽  
垣根なきキャンパスにあり山桜  
学長室こたひの春は富士を見て

2021年3月号

瓢鮎抄（一四七） 尾池和夫

池浚へ底に柱状節理出づ  
初霜や流れくつきり池の底  
枯池の底離れざる黄鶺鴒  
この穴は井戸かと覗き冬の空  
茶の花のほつりほつりと枳殻邸  
乱杭の取替へすすむ冬の池  
マスクしてマスクはづしてマスクして  
ビルの尽き国道横の九条葱

髪塚のかたはら石露の花枯れず  
白菜の芯までほろほろ鳥の嘴  
大寒の夜や湯疲れの不整脈  
キャンパスに人影まばら二月尽  
留学生招きハラルの雛祭  
啓蟄や赤字地下鉄けふ三度  
馬術部の馬の近寄る野蒜かな  
若草の籠にせまり来馬の顔  
優勝の馬の厩舎ぞ雀の子  
濃紺の袴姿の卒業す

2021年2月

瓢鮎抄（一四六） 尾池和夫

岡持ちの路地裏を出る十二月  
根回しの書類仕上がり温め酒  
牡蛎飯の飯見えざると釜覗く  
大鋸屑にくるまれて着く車海老  
冬もみぢ火難のがれし釈迦如来  
背鰭のみ見えて乱れし冬の池  
枯蔓をたどり正体判明す  
臘梅の香りの昼や鶯の笛

麦青む遠くは白き比良の峰  
田のかたち畝にかたちに雪の原  
雪雲やここから先が関ヶ原  
くづけるとふ大崩なす冬の海  
一面を氷柱としたり砂防ダム  
初富士や「ちきゅう」母港の清水港  
枯芝に晴着集まる三日かな  
駿河湾波の見えざる四日かな  
愛鷹山の高さ計算して五日  
双腕重機威力たしかに出初式

2021年1月

瓢鮎抄（一四五） 尾池和夫

トラクターの跡追うてをる真雁かな  
文楽のごとく棚田の小白鳥  
空襲の疵ある银杏散りにけり  
品川の流民叢塚残る菊  
冬ざれや岐阜羽島駅通過待ち  
東寺のみ日矢のあるなり時雨雲  
大雪や夕餉のための野菜買ひ  
十三重塔をよるべの冬の鳥

冬の日や波状砂目の影の濃し  
願はくは益者三楽年新た

参詣は川くだりより冬の朝  
蓬来の長ながしきを奥座敷  
夕されば黒豆逸るる祝箸  
愉しみは浅酌低唱炬燵なり  
いふなれば座食逸飽風邪ごち  
冬の朝散歩の犬の顔なじみ  
人面岩洗ひ浄むる冬の潮  
荒波の間合よ冬の二日月